

今、あらためて読みたい夏目漱石の作品とその魅力を伝える本

誰もがその名を知っている文豪・夏目漱石。今年は没後 100 年、来年は生誕 150 年と記念すべき年が重なり全国紙での再連載など、改めて夏目漱石が注目されています。今回は漱石の作品や関連した本をご紹介します、その魅力を再発見してみようと思います。

1 冊目は夏目漱石/著「坊っちゃん」です。

漱石の代表作のなかでも特に有名な作品です。曲がったことが大嫌いな主人公「坊っちゃん」が四国・愛媛に赴任し、個性豊かな先生や生徒たちとの“バトル”が繰り広げられる物語。生粋の江戸っ子でもある坊っちゃん、作中でその赴任先愛媛県について「ほかの所はなにを見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ。」など、皮肉たっぷりの表現。読んでいるこちらが思わず苦笑いしてしまうほどです。時代は今と大きく違うものの、東京に置いてきた下女・清との強い絆など、現代と変わらない生き生きとした人間描写が楽しめる作品です。

2 冊目は姜尚中/著「姜尚中と読む夏目漱石」です。

なぜこれほどまでに漱石作品は人々に長年愛され読み継がれてきたのか…その魅力を伝えてくれる一冊です。著者は政治学者でありながらテレビ出演や本も多く出版している姜尚中。多方面で活躍中の姜尚中は、折りに触れ夏目漱石の作品と向き合ってきたといいます。今回のこの本では「吾輩は猫である」「三四郎」「それから」「門」「こころ」などの作品を通して漱石の考え方や人物像をわかりやすく解説してくれています。また、森鷗外との対比など様々な角度から取り上げてもおり、漱石作品をまだじっくり読んでいないという方にも入門書としておすすめの一冊です。

3 冊目は伊集院静/著「ノボさん ～小説正岡子規と夏目漱石～」です。

“ノボさん”とは正岡子規の愛称。俳句や短歌で大きな功績を遺し、常に多くの友に囲まれて過ごしていました。対して東大で同級生でもあった夏目漱石は秀才とうたわれ近寄りがたい存在。対照的な二人ですが、落語好きがきっかけで急速に距離が近づき、お互いの才能を深く認め、多くの時間を共に過ごしました。松山で二人が同居していた際には大食漢で浪費家の子規に文句もいわずお店に支払いをしていたのは漱石だったそうです。東大を退学しようとする子規を何度も必死に止めたのも漱石。合理主義で冷たい印象のある漱石にしては意外なエピソードにも思えます。生涯変わる事のなかった二人の友情を通して、知られざる漱石の一面を垣間見る内容となっています。

この他にも図書館には夏目漱石に関する本がたくさんあります。ぜひ読んでみて下さいね。